
咲かない桜の枯れない想い

FION

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

咲かない桜の枯れない想い

【NZコード】

N5878K

【作者名】

FION

【あらすじ】

桜の咲かなくなつた世界。

そんな世界の不思議な冒険の話です。

ここは、桜の咲かない世界。いや、咲かなくなつた世界と言つたほうが適當だらうか。

桜つてのは昔、一つの桜の木から接ぎ木とやらで世界中に増やされていつたらしい。

つまり、かつて世界中についたらしい桜は同じ遺伝子の所謂クローンというものらしい。

それらの桜は同じように美しく、全ての桜に人を魅了する力があつたとか。

その桜がある日、一斉に枯れたらしい。

『春樹……』

ところで、何でオレがガヤガヤと賑わう教室の隅で1人、こんな説明じみた感慨に耽つているかといふと。

『ねえ、春樹……』

夢を見たんだ。もう、ここにはないはずの桜の木、その下でみんなと笑いあつている夢を……。

『おーい』

あ、みんなと言つても、知つてるのは1人だけで、他の何人かは知らない人だつたけど。

『ねえ……』

さつきからオレの肩を揺らしていた手が離れたかと思つたら、さつきまでとは違う低い声が聞こえてきたりして……。

『つー……』

はい、こきなり肩を殴るのはやめて下さい。地味に痛いのが続きます……。

『何だよ、小鳥』

肩をさするオレの目の前に立つてゐるのが夢にでてきた1人だつ

たりするのだが。

名前は小鳥。たかなし じゃなくて、小鳥遊櫻。さくら 陸上部所属。顔はまだまだ幼さを残した感じで可愛らしく、髪は短めで陸上してる時だけ髪をくくるとかくくらないとか、性格は基本的に明るくて面倒見がいい。

学年の男子には、かなりの人気で、親同士が仲良く、家は隣、生まれた日も一緒に、ゆえに幼馴染なオレは学年の男子から命を狙われてるとか……。

「今日の晩御飯、何がいいか考えといてね。あ、買い物は手伝つてよ」

あー、今日は親が……。といつか、皆さん、急に静かになるの止めて下さい……。

「あ、うん……」

またね、と立ち去る小鳥……。ひそひそと話し始める女子たち……。そして、小鳥が教室から出るのを待つ男子たち……。

「いや……。違うよ」

殺氣だつた目でオレを睨む男子たちを尻目に後ずさると……。軽く肩を叩かれて振り返ると。

「いや、わかってるんだよ。お前ら幼馴染だし親が仲良しだもんな。どうせ、親同士で旅行とかそんなノリだろ……？」

口の端をひくつかせながら、肩の手に力を入れて問い合わせる友人その1……。

その通りですよ。わかってるならそんなに睨むのやめてくれ……。

「わかってるんだけどさ。ほら、小鳥遊さんの手料理食べたいじゃん。羨ましいじやん？だから、1発殴らせろ」

「あはは……」

しばらくしてオレは、何とか廊下に出て走った。全力で。

その後ろを何人もの男子が追いかけて……。

「1発、1発だけでいいからさ」

後ろで誰かが叫ぶと、何人かの賛同の声があがり……。全員に1発ずつ殴られたら、何発殴られるんでしょう……。

「逃げるな、ロリコンやろうー」

ロリ……つて、関係ないだろ、べつに……。何で、そんな趣味を公開されなきやならんのだ。

「他の奴ならまだしも、何でお前みたいなロリコンに」

「オレ、泣くよ？ 泣いてもいいよね？ つか、ロリコンの何が悪いんだよー。」

「ん？ 何か、静かになつた……？ 後ろばかり気にしながら走つていたオレが悪いんだけど……。」
目の前に女の子が2人……。もちろん、オレは全力疾走中で止まれるわけもなく……。

「あ、危な……」

言つが早いかオレは廊下を歩いていた女子にものすごい勢いでぶつかつた……。

「と、ごめん……」

立ち上がりながら振り向くとオレを追いかけていた男子たちの姿は見えなかつた。

「何なの……。って、春樹……？」

オレがぶつかつた相手は、幸か不幸か小鳥だつた。小鳥はその豊かすぎる胸を揺らしながら……。

あのー、だから肩は地味に痛いのだけれど……。

「へー、君が春樹くんか」

小鳥と一緒に歩いていた、もう1人の女子が横でクスクス笑つていた。

「ボクは、月見里桜夜。桜夜って呼んでいいよ

肩よりも少し伸ばした黒髪に、幼さを残しながらも端整な顔立ちだ。そして、通常なら黒目があるべき場所は、真つ赤な色をしていた。キレイな真紅の瞳をもつた少女だつた。

「あー、ボクの目めずらしいでしょ。宝石みたい？ お母さんからの遺伝なんだー」

「え、うん。ごめん」

いつの間にか見入つてしまつていたらしい。それにしても、宝石みたいとか自分で言つうか……。

「え、別に謝ることじゃないでしょ。あ、小鳥ちゃん生徒手帳落としたよ」

そう言つて小鳥に生徒手帳を渡してあげる桜夜。んー？ 2人と

も結構可愛いよな……。教室戻つたら何されるか……？

「2人つて確か同じ誕生日なんだよね？」

小鳥から何か聞いているのだろうか。オレの名前も知つてたし。

「それなら2人も口スト・チェリー生まれなんだね」

「ロスト・チェリー……？」どこかで聞いたことがあるな。たしか

……。

「それって、桜が枯れた年のことだろ？ そんなのオレらと1個下の学年のほとんどがそうだろ」

「つづん。まあ、それでもあつてるんだけど本当は、桜の咲いた7田間をさすんだよ」

桜夜の声が少し真剣なものに変わっていた。

「えつと、私、聞いたことあるかも。私たちは季節はずれの桜が一斉に咲いた日、その日に生まれたつて」

「そう、小鳥ちゃんたちの生まれた2月25日に桜は突然咲きだして、ボクの生まれた3月2日を最後にもう咲くことはなかつた。つまり、最後に桜が咲いていた、2月25日から3月2日までの7日間を失われた桜の日々、ロスト・チェリーって言つのだよ」

桜夜は説明し終えると、胸を張つてみせた。いや、今氣付いたけど、胸薄いんだね。胸がないのは良いことだ。

つと、授業が始まりそだからといふことで、この話はまた今度ということになり、それぞの教室へ。出来れば教室には戻りたくないのだが……。

「あ、今日の晩御飯、ボクもお邪魔するからアロシクねー」

桜夜が廊下中に響き渡るような声で、少し離れたオレに手を振つてきた。

あー、また今度つてその時のことだったのかな。とか、気楽なこと考えていると……。

その声は、近くの教室はもちろん、廊下の隅に隠れたオレのクラスマイトたちにも聞こえていたわけで……。

「授業があつて命拾いしたな。小鳥遊さんだけじゃなく、月見里さんまで……。こんな口づ……」（以下略）

と後ろの席に座る友人その1。

「お前も知ってる通り、小鳥は幼馴染だし、桜夜は今日初めてあつたばつかの小鳥の友達だぞ。その2人と晩飯つたつて、オレが1人になるだけ……」

「何だ……？ 授業中に女子を囮む話とは……」

見上げると眉の端をピクピクさせる担任の姿がそこにはあつた……！

何でオレが怒られるんだ。ねえ、オレが悪いの？
オレが何したって言つんだよ……。

あれからオレとクラスの男子たちは担任様に説教され、クラスの男子たちには担任様の目が光つてたりして……、オレは無事、歸路に就くことが出来ました……！

しかし、桜の咲いた7日間ねえ……。

かつて、桜並木と呼ばれたその道には、一定の間隔で土があらわになつた部分がある。

まだ、桜が生きていた頃、その場所に桜があつたのだ。詳しいことは……、もちろん覚えていないが土の中に寿命を迎えた桜の根が残つてることで、その土で植物が育たなくなるとかそんな感じの土の病気だそうだ。

まあ、それも1つの説であつて、実際には、今でもいろいろと議論やら研究やらがされているそつだが。

土を交換したりして、桜のあとを消している町もあるらしいのだが。この町では、一切そういう事はされなかつた。

クローバーやら何やらの縁の中に、一定の間隔である茶色、それがかつての失つてしまつた桜を思い出させてくれるとか、そんな理由だつたか。

まあ、オレたち桜を知らない世代にとつても、その茶色は意味のあるものだつたりするのだが……。

かつてあつたらしい桜をオレたちに夢見させてくれるものだから。

「寒……」

オレは、この寒い中頑張つて走つている小鳥に尊敬の念を抱きながら、小走りに家を目指すのであつた。

季節は冬の終わり、もうすぐ春休みに入ろうとかといつ、まだまだ肌寒さを残す時期だった。

小鳥から部活終わった、というメールが届いたので、適当に着替えて帰ってきた道を戻る。それにしても、行き帰り以外で通学路を歩くというのは嫌なもんだな……。

しばらく歩くとジャージ姿の小鳥と桜夜と合流した。2人の背中には陸上部と書かれていた。桜夜も陸上部だったんだな。

「おつかれさま」

「うん。ボク、とっても疲れたよ……。甘いもの食べれば元気になると思うんだけど……」

近くにあつたコンビニをちらちらと見ながら何か訴えかけてくる桜夜……。これは、おじれという感じでしううか……。

「どうぞ、寄つて来てください。オレはここ見守つてますので……」

最大限の回避行動をとつたつもりだったのだけど、結局タイヤキを人数分おこらされました。

寒かつたし、いいけどさ……。

「それで、晩御飯何食べたい？」

「あー、何でもいいよ。小鳥が食いたいもの作れば？」

「私は何でも……。桜夜は何がいい？」

「へ……？ ボク？ んー、ちょっと待つてて、今考えるから。それにしても、2人つて新婚さんみたいだねえ」

お前もその手のノリなのか……。ニヤニヤするな、めんどくさい……。

「オレたちは生まれた時から、一緒に育てられたみたいなもんだしな。兄妹みたいなもんだろ……」

「ふーん……。あ、ボク、カレーがいいな。ほら、みんなで御飯作るつていつたら、カレーじゃない？」

「ふーんつて、興味ないなら余計なこと言わんください……。

「カレーはいいけど、みんなで作るつて、オレも作るのか？」

「あたりまえでしょ」

満面の笑みで親指を立てる桜夜……。オレとしては、小鳥は料理上手だし、小鳥に任せておけばいいと思うのだが……。

何故かずっと黙っている小鳥の頬が桜色に染まっていることにオレは気付くわけもなかつた。

「カレーには隠し味にハチミツが入るといいんだよー」

そう言いながら鍋に大量のハチミツを投入しているのは桜夜だ。

……

「ちょ、待て。どう考へても入れすぎだろ。それ隠れないからな。もう隠し味じゃないからな」

「ハチミツ美味しいから隠す必要なし」

ない胸を力いっぱい張る桜夜は、オレの手によつて台所から引つ張り出されました。

あとは小鳥の頑張りに期待しそう……。

「ハチミツ、美味しいのに……」

少しずつチロチロと舐める姿はなんとも愛らしい。

「桜夜つて、甘いもの好きなんだな」

というのも、スーパーではカレーは甘口じやなきや嫌だ、とか騒ぎ立て、小鳥の家に向かう途中、常備しているらしさに棒つきの飴をずっと呑えていた。

「甘いものはボクのエネルギーなんだよー……。甘いものがなきや動けない。いや、動かない！ それに……」

言葉を濁した桜夜は、ベランダにて何かすると、すぐに戻ってきた。

「ロスト・チヨリー……。魔法とか超能力みたいなのがて信じるかな」

桜夜は、くたびれたタンポポを持っていた。おそらくベランダから探してきたのだろう。

「信じないことはないかな。オレはそういうのを見たことがないから信じられない。けど、魔法はない、なんてのを見ることはできないだろ？ だから、信じるかな」

「そつか、それじゃ見せてあげるよ

「セテアゲル……？」漫画で書つてゐるのクエスチョンマークが頭の上を3つくらいフワフワしている状態のオレに桜夜が微笑み……。

桜夜の手の中のタンポポがほんのりと桜色の光に包まれる。少なくともオレにはそう見えたのだ。すると、くたびれていたはずのタンポポが、茎を真っ直ぐ伸ばし明らかに元気になつてゐる。心なしか普通のタンポポよりもキレイな花を咲かせているように見える。

「これがボクの力。すごいでしょー？」

「な、何やつたんだ……？」

「それは、晩御飯の時のお楽しみー。ほんと、小鳥ちゃんも春くんも何も知らないんだもん」

小鳥にも聞いて欲しいところだらうか。しかし、春くんつてオレのことですよね。わざわざ春樹くんだった気がするんだが……。

「つまり、ロスト・チエリーだよ」

わけのわからない言葉から始まつた桜夜の講話は、

「それで、キミたち2人もロスト・チエリーなのだよ」

凹凸のない胸を力いっぱい張る桜夜の意味不明な言葉で終わることになる……。

ロスト・チエリー、桜を失つた日々、桜の咲いた7日間……。

この7日間に生まれた子供は極端に少ないらしい。原因は不明。だから、その事実は広く知れ渡つていないとか。

そして、その7日間に生まれた子供、それらの子供たちは不思議な力をもつて生まれてくるとか桜夜は言つ。

けれど、オレにはそんな力ないし、小鳥もそんな力に覚えはないと言つ。

桜夜が言つには、力が目覚めていない、あるいは力に気付いていないだけだと……。

なかには、自分の意思とは関係なしに力が発動し続いている、なんて例もあるらしい。

つまりは、自分が気付いていない力といつもあるかもしれないってことなのか……。

それぞれの子供たちは、違う力を持つていて、研究所のようなところで研究されている子供もいるらしい。むしろ、桜夜のように普通に生活できているものは少ないと言つ。

こんな話をして桜夜が何を言いたかったかと言つと……。

「桜を……。本当の桜を見てみたいと思わない？」

というのが桜夜の言いたかったことらしい。

オレは、桜のない町 桜のない世界に生まれた。見たくないと言えば嘘になる。しかし……。

「私は見たいかな。でも……、桜はもう……」

小鳥が小さく呟いた。桜はもう咲くはずがないのだから。 当

時、桜を生き残らせようといろいろな研究がされたのだ。

「桜が見れるわけないだろ……」

もちろん、オレも小鳥と同意見だ確かに見たい。でも、できるはずがないのだ。

「だからー、ボクたちが咲かせればいいんだよ」

「は？ 確かに桜夜の力を使えば桜を咲かせることも出来るのかも知れない。しかし、肝心の桜がないのだ。咲かなくなつた桜を何年も放置しておぐわけがないのだから。

「……」

オレと小鳥は目を見合させた。小鳥は目をパチクリさせている。おそらくオレも同じような顔をしているだろう。

しばらく沈黙が流れたのは言つまでもない。

桜夜は自分の説明不足に気付いていないのか、オレたちの返事を待っていた。

……と、沈黙を破ったのは、桜夜でもオレでも、ましてや小鳥でもなかつた。

聞きなれた電子音が響き……、それが自分のケータイだと気付くのにどのくらいかかつただろう。

それは小鳥も同じだった。オレと小鳥のケータイが同時に鳴り始めたのだ。

現在、小鳥の両親と旅行中の母親からの着信だつた。

オレは嫌な汗が流れるのを感じながら電話にでた。

『あー、春樹だよねあのさー……』

妙にハイテンションな母親からの電話の内容は、要約するとこんな感じだ。

旅行先で小鳥の母と共通の友達であるヤマナシさんに出会い、今も近所に住んでいることが判明した。普通の親ならそこで終わり。これからもヤマナシさんとの交流が生まれるくらいだらう。そこで、うちの親は、もう春休みだし、しばらく旅にでるとか言い出したわけで……。

まあ、オレと小鳥の両親は旅行好きで、何回か予定が延びたことがある。

それにヤマナシさんを巻き込んでしまつただけだ。

「帰宅予定について何か言つてたか？」

案の定、小鳥は苦笑いして首を横に振るだけだった。

「ヤマナシ……あれ、ヤマナシつて確か……」

オレの不安を裏付けるように月見里桜夜のケータイが鳴り響いた。

Chapter 4 - 桜の残したモノ - (後書き)

一応、これで1章が終了になります。

「なあ、昨日の晩飯なんだつた……？」
校門から校舎へと向かう途中、突然肩を叩かれ何事かと振り向くと実にどうでもいいことを口にする友人その1の……何と言つべきか殴りたくなるような笑顔がそこにあつた。

「……カレー」

「なんだ、その新婚メニューは……」
いや、新婚メニューって何だよ……。少しひはもしかしてバカの人なのかな？

「けど、なんだ、上手くはないぞ……？」

うん、あれは上手くはなかつた。カレーと呼んでいいのかも微妙だつた。食べれなくなつたのは小鳥の頑張りによるところだと思う。

「はあ？ 手作りならなんでもいいんだよ！ つか、小鳥遊さんの料理が不味いとでも？」

気持ち悪い笑顔は消え、見れる顔になつたものの、口元をひくつかせながら笑う様子は結構な恐怖だ。

オレが男子から命を狙われてるとかいう噂もまんざりじやなくなつてきた気がする……。

「いや、確かに小鳥は料理上手だよ。けどさ、桜夜がカレーにこれでもかつてくらいハチミツいれるから。食えたのが奇跡だと思うくらいの量だつたよ。それに、夜中に桜夜の家まで荷物運びに行かせられるし……」

「ああ、月見里さんは重度の甘党つて噂だしな。で、荷物運びって？」

お、どうやら機嫌が少しは直つたらしいな。目以外は正常な男子の顔だ。

「なんかさ、うちの親と桜夜の親が知り合いだつたらしくてさ。旅

先でばつたりあつたから、一緒に旅行するとかなんとか……」

「なるほどな。つまり、小鳥遊さんの家に月見里さんが泊まつて今日からお前はウハウハと？」

「……は？ えっと、なんだか矢のような視線が……。

「ちょ、ちょっと待て！ オレは何にもしてないだろつ！ つか、お前らオレのこと虚めて楽しいのか？」

言つが早いが、オレは走り出していた。それはもう全力で……。だつて、男子が怖い。

「虚めているんじやない。妬んでるんだ！」

オレを追いかける男子たちの中から誰かがそう言つと、一同に贅

同の声をあげ……つて、もういいか。

「なんだか知らんが、正直に言えば許されるつてもんじやないんだぞ……」

始業のチャイムによつて解放されたオレは朝から疲れきつた体を引きずつて教室に向かうと、我らが担任様が待つっていた。……鬼の形相で。

「誰が鬼だ！」

「え、何？ 読心術……！？」

「教師の必須スキルだろう？」

「この人アホだ。凄いけど……凄くアホだ。

「ほお？ 今回は見逃してやるつとも思つたが、怒られたいらしいな？」

オレを追いかけてた男子たちは先に教室に来て怒られたらしい。なんか、全員怒られた後みたいだけど……全員がオレを追いかけてたわけじやないよね？

よく考えたら、オレを追いかけてたのクラスの奴らだけじやね？

あれ……？ もしかして、アホが集められたクラスなのか？

クラスの女子の方々には深く同情するよ……。

と、教室内をみると、オレを睨んでる男子はとりあえず放つとい

て、女子は……くすくす笑つてるだけですね。

「はあ……」

オレは深々とため息をついた。もちろん女子に同情してじゃない。

……自分に同情してだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5878k/>

咲かない桜の枯れない想い

2010年10月8日13時55分発行